

## 【研究ノート】

### デイサイプルス派の歴史と日本宣教

バートン・ストーンとキャンベル父子の運動について

赤田直樹

#### I はじめに

#### 1 研究の概要について

聖学院は、デイサイプルス派の伝統の上に建てられた学校である。聖学院においてはこれまで、同派について、ジョージ・T・スミス (George Thomas Smith) およびチャールズ・E・ガルスト (Charles Elias Garsl) の両宣教師の来日から語られることが多かったように感じられる。その一方で、アメリカにおける同派の成立の歴史やその後の展開および現状、ならびに日本宣教の展開の全体像については、滝野川教会の教会員であった秋山操による『基督教会 (デイサイプルス) 史』(秋山操編著、基督教会史刊行委員会、一九七三年) 以外には、詳しく語られてこなかったように思われる。

先達の良い伝統を次の世代に大切に継承するため、あるいは解決してゆくべき課題には真摯に向き合い取り組んでゆ

くためにも、その歴史と現状、そして日本宣教の展開の全体像について、将来的にまとめてゆきたいと思う。

今回は、デイサイプルス派の歴史の概略について俯瞰した後、スミスおよびガルス両宣教師の来日を契機として日本に生み出されていった諸教会や諸学校および諸施設についての現状を把握した上で、デイサイプルス派がアメリカで生まれることとなった発端のバートン・ストーン・ストーンの運動と、キャンベル父子の運動が合同する直前までの歩みについて、紹介することとしたい。

## 2 個人的な動機について

前書きが長くなって恐縮であるが、どうして私がこのようなテーマ、日本のキリスト教会史においてはある意味ニッチなテーマを取り扱おうと思ったのかについて、個人的ではあるが、その動機について述べておきたい。

私は、「キリストの教会」(有楽器派)という小さなグループの中の、さらに小さな「恩多キリスト教会」の牧師の息子として生まれ育った。私の生まれた教会は、東京都にはあるがしばしばニュースでも埼玉県と間違われる東村山市にある。その小さな礼拝堂兼牧師館は、父から聞いた話によると、埼玉県狭山市にある稲荷山公園にあった米軍の家を移築したものであったという。そして、私が子どもの頃の礼拝出席者数というと、牧師家族含めても五、六人というくらいまた小さな交わりだった。

「教会というものは小さくて家の教会のようなもの」と子どもの頃の私は当たり前のように思ってた。それでも、「キリストの教会」の全国大会に参加すると一〇〇名を超える人々が集い、こんなにもたくさんの方々が集まっているものなのかと驚いたものであった。

やがて、私は聖学院大学に入学することになり、その際に「聖学院は『キリストの教会』と昔関係があった」という

話を耳にした。聖学院の教派的伝統である「デイサイプルス派」と「キリストの教会」は、昔つながりがあったというのである。しかし、家族含めても五、六人の礼拝出席という実家の小さな教会と、立派な校舎が並び、偉い先生方や教職員の方々がたくさんいる聖学院とが、昔つながりがあったというのは正直ピンとこなかった。

また「神学」という耳慣れない言葉を私が聞いたのも、聖学院が初めてだった。「キリストの教会」の交わりでは一度も聞いたことがなかったその言葉なのだが、聖学院大学では先生方もクリスチャンの学生仲間も「神学的に〇〇だよね」みたいに話し合っているのを聞くと、「デイサイプルス派」と「キリストの教会」は昔つながりがあったということさえ忘れてしまうほどに距離感を感じていたのである。

それでも、聖学院大学に入学した当時には大学の4号館で行われていた日本基督教団緑聖教会の礼拝にたまに出席することがあり、聖餐式を毎週行っていることや、洗礼を受ける時には全身水に浸かる全浸礼を行っていることを伺い、「デイサイプルス派」と「キリストの教会」との共通点を確認することはできたのであった。

その後、私は恩多キリスト教会で洗礼を受けた後に献身をし、旧デイサイプルス派の中心教会であり日本基督教団の教会となった滝野川教会に転入会し、神学生、伝道師、副牧師として過ごした。その後の二〇〇五年からは、旧デイサイプルス派が日本伝道において最初に生み出した教会である日本基督教団秋田高陽教会で牧師として一五年を過ごし、また旧デイサイプルス派が日本において生み出した諸学校の中で、現存する中では一番古い秋田幼稚園の園長として過ごす中で、母教会のグループである「キリストの教会（有楽器派）」と、学生時代を過ごし牧師として仕えてきた「デイサイプルス派」と、そして個人的にはこれまで接点がありませんでした「キリストの教会（無楽器派）」とが同じルーツに基づくものであり、それと同時に「私」という存在のルーツであることを深く知るに至ったのである。

もっと具体的に言うならば、私の父は「キリストの教会（有楽器派）」の牧師であり、母方の祖父も同派の牧師であつたので、「キリストの教会（有楽器派）」がなければ私は生まれてはいない（母方の祖父は阿部青鞋<sup>あべせいあひ</sup>。第三〇回現代

俳句協会賞を受賞した俳人でもあった)。さらには「キリストの教会(有楽器派)」はスミスおよびガルスト両宣教師が来日した当時は分かれておらず、同じ「デイサイプルス派」であり、もつと後に分かれていったのである。つまり、デイサイプルス派の宣教師たちが来日しなければ、私はこの世に存在せず、聖学院大学で学んだ日々もないし、滝野川教会、秋田高陽教会および秋田幼稚園で過ごした日々もない。それどころかそれらの場所すらも存在してはいないのである。私は、自分の存在それ自体も、自分が過ごしてきた場所それ自体も、デイサイプルス派のミッションが、スミスおよびガルスト両宣教師を日本に送り出すことなしには在り得なかったことを深く知るようになったのである。

だからこそデイサイプルス派の歴史を明らかにすることが、自分という存在のルーツを明らかにすることであると同時に、学校法人聖学院に携わる一人ひとりにおいても、聖学院で過ごすことの意味について示唆を与えるものではないかと考えるものである。

これより、自分のルーツを探る意味も込めて、デイサイプルス派の歴史と日本宣教について記してゆきたいと思う。

## II デイサイプルス派の歴史の概略について

(主に日本とのかかわりにおいて)

デイサイプルス派の歴史については、滝野川教会の教会員であった秋山操による『基督教会(デイサイプルス)史』に詳しく述べられている。特に第一章『基督教会』の起原と信仰』においては、アメリカにおけるデイサイプルス派の起原と特徴について述べられている。そして、第二章からは同教派の日本伝道の歴史について、第七章においては各教会の歴史について、第八章においては教育事業について、第九章においては教役者の略伝について、それぞれ述

べられている。また、『基督教会（デイサイプルス）史』以外では、同教派の概略について、『日本キリスト教歴史大辞典』（教文館、一九八八年）、『キリスト教大辞典』（教文館、一九九五年改訂新版）、『新・キリスト教辞典』（誠信書房、一九六五年）、『キリスト教年鑑2020』（キリスト新聞社）、『キリスト教礼拝・礼拝学辞典』（日本キリスト教団出版局、二〇〇六年）等に記されている他、ウィリントン・ウォーカーの著した『キリスト教史4 近・現代のキリスト教』（野呂芳男、塚田理、八代崇訳、ヨルダン社、一九八六年、原書はWilliston Walker, *A History of The Christian Church* (New York: Charles Scribner, 1970) の「十九世紀のアメリカ・プロテスタンティズム」の中に、また、『宣教師と日本人——明治キリスト教史における受容と変容』（キリスト教史学会編、教文館、二〇一二年）の第六章「デイサイプルス教会」にも紹介されている。

ここでは、主に『基督教会（デイサイプルス）史』の第一章『基督教会』の起原と信仰より、デイサイプルス派の歴史の概略について紹介することとしたい。デイサイプルス派が生まれた背景には、独立戦争後のアメリカにおいて、「政治的解放運動や開拓者精神が盛んであったが、その反面道徳的・精神的状態は最低であった。そうした背景から、一八世紀の終わり頃から信仰復興が起った<sup>(1)</sup>」という状況があり、その中に「キリスト教徒を異った信条のかいの中に分離していた教派的垣根を打破するにはどうしたらよいかと探求し始めた人々<sup>(2)</sup>」が現れてきたことによる。その中の一人に、もともと長老教会の牧師であったバートン・ウォーレン・ストーン (Barton Warren Stone) がいた。彼は、同志たちと共に一八〇一年にケンタッキー州ケインリッジでリバイバル集会を指導したが、この時の説教が長老教会のウェストミンスター信仰告白と一致しないということなどが後に問題とされ、同志の一人が教会裁判に訴えられることとなった。ストーンたちは、人間的権威である信条に反対することを心に決め、長老教会を離れることとなる。この時に彼らが組織したスプリングフィールド長老会は、一八〇四年には「スプリングフィールド長老会の遺言状」(Last Will and Testament of The Springfield Presbytery)<sup>(3)</sup> という宣言を発表、名称をクリスチャン・チャーチと改めた。また、

アイルランドにおいて長老教会の分離派（セシダー派）の牧師をしていたトーマス・キャンベル（Thomas Campbell）は、一八〇七年にアメリカに渡り、ペンシルバニア州で同派の牧師となる。しかし、長老教会の別派の信徒を聖餐式に招いたことから、長老教会を離れることとなった。そして、一八〇九年にワシントン・クリスチャン協会を設立し九月七日には『ワシントン・クリスチャン協会の宣言および提言』（Declaration and Address of the Christian Association of Washington<sup>(4)</sup>）を公表した。秋山はこの宣言が同派における「歴史上最も重要な文献」となったこと、「この派ではこの日をもって教会の創立日としている」ことを述べている<sup>(5)</sup>。同宣言について秋山は「唯一の教会」「教会の憲法」「団結の基礎」の三つの点に要約しているが、その詳細については、後に述べることにする。父トーマスがこの宣言を書き上げた後、息子のアレキサンダー・キャンベル（Alexander Campbell）もアメリカにやってくることとなった。彼は父の宣言を読み感激し、生涯を父の始めた運動に献げる決心をする。ワシントン・クリスチャン協会は一八一一年にブラッッシュラン教会を設立、後にレッドストーン・バプテスト協会に加入するが、一八二七年にはバプテスト諸協会はアレキサンダー等改革派（リフオームド・バプテスト）を仲間として認めないと宣言するに至り、この時から、彼らはデイサイプルス・オブ・クライストとして知られるようになったという<sup>(7)</sup>。一八三〇年にはバプテストからデイサイプルスが離れることとなり、一八三一年一月三日にバートン・ストーンのクリスチャン・チャーチと、キャンベル父子のデイサイプルス・オブ・クライストが合同することとなったのである。このような経緯から、秋山は同派の起源について「長老教会内の運動」<sup>(9)</sup>と語っており、ウイリントン・ウオーカーもまた、『キリスト教史』の中で、「長老教会内の信仰復興主義をめぐる緊張」<sup>(10)</sup>状態の中に生まれたものであったことを示唆している。

デイサイプルス派について、日本において現在では、毎週聖餐式を行っていると、洗礼の時は浸礼であるというイメージのみが残っているかもしれない。しかし実は、Christian Church (Disciples of Christ)「基督教会（デイサイプルス）」とは、バートン・ストーンのクリスチャン・チャーチとキャンベル父子のデイサイプルス・オブ・クライストが

合同したものであったのである。<sup>(11)</sup> バートン・ストーンおよびキャンベル父子とその運動については、後にさらに詳しく触れることとなるが、その二つの運動が一八三二年二月二日に合同して生まれたのが Christian Church (Disciples of Christ) である。なお、成立年については、年末だったため、一八三二年一月一日と捉える考え方もあるようである。名称については、バートン・ストーンは「Christian Church」を主張、トーマス・キャンベルはストーンの名称を支持したが、若かったアレキサンダー・キャンベルは「Disciples of Christ」を主張。結果として、両方使うこととなった。<sup>(12)</sup> デイサイプルス結成の前後を「聖書復帰運動」(Restoration Movement) と呼び、現代では「ストーン・キャンベル運動」と呼ばれることが多い。なお、名称については、デイサイプルス・オブ・クライストやクリスチャン・チャーチエスやチャーチエス・オブ・クライストなど、随意で用いられることも多く、自主独立の各教会の集団であったことからクリスチャン・チャーチエス(デイサイプルス・オブ・クライスト)という複数形の名称が用いられていたが、一九六八年の機構改革において、クリスチャン・チャーチ(デイサイプルス・オブ・クライスト)という単数形の名称となっている。<sup>(13)</sup>

このようにして成立したデイサイプルス派の中に一八七五年に「外国クリスチャン伝道協会」(Foreign Christian Missionary Society: FCMS) が結成され、<sup>(14)</sup> 一八八三年には「外国クリスチャン伝道協会」による日本宣教がなされ、一八八四年にはスミスおよびガルスト両宣教師による秋田伝道が行われ、同教派による日本各地への伝道が開始されるのであるが、組織を持つことに対する是非、奴隷問題(容認か廃絶か穏健か)や、南北戦争(一八六一―一八六五年)などを背景に、北部の教会を中心に広まっていったリードオルガンの使用に対して、主に南部の教会から、聖書的でないとクレームが出されるようになった。その結果、一八八九年には、アメリカではデイサイプルスからチャーチ・オブ・クライスト(クリストの教会無楽器派)が分離したのである。同派の日本宣教開始からわずか五年後、スミス、ガルストの秋田伝道から四年後のことであった。

デイサイプルス(15)の日本宣教開始から一五年後の一八九八年二月二八日、ガルストは四六歳で天に召されたが、デイサイプルスとチャーチ・オブ・クライスト(16)（キリストの教会無楽器派）のそれぞれの宣教師たちは日本において協力しつつ伝道していた。

ガルストの死からおよそ二〇年がたった一九一九年にはデイサイプルス内の宣教団体である「外国クリスチャン伝道協会」を、他のデイサイプルス内の団体である「米国クリスチャン伝道協会」(15)（American Christian Missionary Society: ACMS）と「クリスチャン婦人伝道局」(16)（Christian Woman's Board of Missions: CWBM）とが合同し、「共同クリスチャン伝道協会」(17)（United Christian Missionary Society: UCMS）へ合併するという出来事が起こる。この時に、中央集権的な組織への賛否や、自由主義神学への賛否、エキュメニカル運動への賛否が起こり、結果として一九二〇年には、アメリカでリベラルな Christian Church（Disciples of Christ）と、保守的な Christian Church（キリストの教会有楽器派）とが分離するようになったのである。

日本国内においては、太平洋戦争開戦直前、宗教団体への政府の統制を目的とした宗教団体法に基づき一九四一年に日本基督教団が設立し、日本の「基督教会（デイサイプルス）」は第三部として合同し、旧デイサイプルス派は戦後も離脱することなく留まっている。また、「キリストの教会」（有楽器派）は第一〇部として合同し、戦後に教団から離脱、「キリストの教会」（無楽器派）は戦時中は閉鎖して戦後に再開した。

これら三派の現状については次の項目で述べてゆくが、現時点では「キリストの教会」（無楽器派）と「キリストの教会」（有楽器派）との間には緩やかな交流があるが、日本基督教団の中にある旧デイサイプルス派の諸教会とはほとんど交流はないのが現状である。なお、二〇〇九年には聖書復帰運動の二〇〇周年を記念した三派合同の礼拝を行い日本基督教団滝野川教会からも代表者が出席しており、二〇一九年には「キリストの教会」（有楽器派）の第七〇回全国大会が日本基督教団秋田高陽教会等を会場に行われるなど、単発的な交流が行われることがある。

### III 現存する教会と学校および諸施設

現存する教会と学校および諸施設について触れるにあたり、デイサイプルス派の宣教師たちによる日本宣教当初のいくつかのエピソードを紹介しておこう。

一つ目のエピソードは、宣教師たちによる秋田県で最初のプロテスタント・キリスト教会と宣教師夫人の死についてである。一八八三年一〇月一九日、スミス宣教師夫妻とガルスト宣教師夫妻が来日する<sup>(18)</sup>。横浜で七カ月日本語を学ぶ間に、バプテスト派のポート宣教師よりまだ宣教師が入っていなかった秋田での伝道を勧められた<sup>(19)</sup>。一八八四年五月三日には、秋田の土崎港に上陸、人力車で久保田（後の秋田）に向かう<sup>(20)</sup>。宣教師たちの住まいとなる武家屋敷はバプテスト派のポート宣教師が用意していた<sup>(21)</sup>。六月一日には、バプテスト派のポート宣教師の説教により、日本におけるデイサイプルス教会の最初の礼拝が行われた<sup>(22)</sup>。これにより、現在の日本基督教団秋田高陽教会（旧秋田基督教会）は六月一日を創立記念日としている。宣教師たちは、豊かな故郷アメリカを離れ、当時の貧しい秋田にやって来たのだが、スミスの妻ジョセフィン<sup>(23)</sup>は、来秋後一年を経ずして、出産後に天に召された。この時生まれた子どもも、一カ月後に天に召された。宣教師たちは、秋田の地に生きる人々に神様の愛を伝えるために、文字通り命を懸けたのである。

二つ目のエピソードは、秋田・東北地方に咲くクローバーについてである。ガルストは、栄養不良の子どもたちが多い現実を見て、ミルクを与えるために乳牛を飼い、その飼料として東北地方で初めてのクローバーを植えた。今日、秋田・東北の地に咲くクローバーは、かつて宣教師たちがこの地に植え、秋田・東北の地に生きる子どもたちを育んだことの証しである<sup>(24)</sup>。

三つ目のエピソードは、実話としての「秋田の赤い靴の物語り」についてである。スミスの妻ジョセフィン<sup>(25)</sup>は、生前に婦人宣教師の派遣をアメリカの本部に要請していた。彼女の死に際してその要請が聞き入れられ、一八八六年にミス・ハリソンが婦人宣教師として秋田にやって来た。ハリソンは教会や学校の他、刑務所でも聖書を教えていた。そこで、殺人罪を犯し無期懲役刑で服役していた女性と出会う。この女性は出産したが、刑務所の中で子どもを育てることはできなかった。ハリソンがこの時産まれた女の子を引き取って育てることとなった。女の子が小学校に入学する時には、彼女の出生の秘密を隠すため、ハリソンはその子を教え子川井運吉の子として籍を入れさせている。ハリソンがアメリカに帰国する際、女の子を連れて横浜から出発、ロサンゼルス<sup>(26)</sup>の大学で学ばせた後、ハワイに渡り、共に日本人のために働いた。宣教師たちは、自らの人生を懸けて、刑務所の中で生まれた幼い命を育んだのである。

四つ目のエピソードは、「マイ・ライフ・イズ・マイ・メッセージ」である。ガルストは後に鶴岡、東京や東北各地で伝道し、単税太郎として税制改革も訴え、一八九八年四六歳で東京の地で天に召された。臨終の床にあつて「遺言はないか」と尋ねられると「My life is my message.」わたしの人生こそわたしのメッセージです」と答えた。ガルストが亡くなった時、伊藤博文は「西洋は未だかつてチャールズ・E・ガルストに勝る贈物を送ったことはない」と語ったという。ガルストは宣教師となる前にはウエストポイント陸軍士官学校出身の軍人であった。戦後、ウエストポイントの卒業生として日本を訪れた人物はダグラス・マッカーサーである。宣教師たちは、自らの栄光を捨ててまでも、日本の地に生きる人々に仕えたのである。

このような、最初期の宣教師たちのリアリティに触れるものが三つある。そのうちの二つ目のものは、スミス宣教師の妻子の墓碑であり、現在、日本基督教団秋田高陽教会の墓地にその墓碑が残されている。二つ目のものはガルスト宣教師の墓碑であり、青山霊園にその墓碑が残されている。三つ目はいわゆる「もの」ではないが、ガルストの墓碑に刻まれた賛美歌である。彼の墓碑には「FAITH IS THE VICTORY」と刻まれている。これは二〇一九年の夏に秋田高

陽教会等を会場に行われたキリストの教会（有楽器派）の第七〇回全国大会で紹介されて私も初めて知ったのであるが、これはガルストの愛唱の賛美歌のタイトルなのだそうだ。日本語では『聖歌』五一四番および『新聖歌』四五八番において「光の高地に」として収められている。確かに、『ガルスト伝』を確認してみると、「……他に遺言はないかと尋ねられると、ガルストは『わたしの人生こそわたしのメッセージです』と言った。ガルストは、『信仰こそ勝利』（讚美歌一四六番）という歌を所望し、歌が終わると、『すばらしい』とささやいた<sup>(28)</sup>」と記されている（現行の『讚美歌』一四六番は違う賛美歌である）。日本基督教団の教会では『聖歌』や『新聖歌』を用いることがほとんどないので、ガルスト愛唱の賛美歌のタイトルが墓碑に刻まれているという伝承も無くなってしまったのであろう。このように、三派それぞれの枠組みや各個教会および諸学校の枠組みを超えた交わりを持つことによつて、デイサイプルス派の良い伝統をもつと掘り起こすことができるのではないかと考えている。そこで、現存する教会と学校および諸施設について把握をしてゆきたい。

## 1 旧「デイサイプルス派」の伝統のうち現存する教会と学校および諸施設

デイサイプルス派の伝統のうち、日本に現存する教会と学校および諸施設について確認してゆきたい。ストーン・キャンベル運動の日本宣教によつて生み出された教会と学校および諸施設が、今現在どのくらい存在しているのだろうか。

まずは、いわゆる旧「デイサイプルス派」（この運動が三つに分かれたものの一つ）の伝統が生み出した教会のうちで、現存するものについて『基督教会（デイサイプルス）史』および『日本基督教団年鑑2020』（日本基督教団事務局、二〇一九年）を照らし合わせながら確認したい。というのは、日本基督教団に残った旧「デイサイプルス派」が生み出し、なおかつ残った教会の中でも、相互の交流がほぼ途絶えてしまっている場合も多いからである。

二〇二一年現在、日本基督教団の中に現存する旧「デイサイプルス派」の伝統が生み出した教会は、一六あり、年代順に次の通りとなる。

秋田高陽教会（秋田県秋田市・一八八四年五月伝道開始・同六月礼拝開始）

本荘教会（秋田県由利本荘市・一八八四年六月伝道開始・一八八七年四月教会設立）

鶴岡教会（山形県鶴岡市・一八八八年五月教会設立）

小岩教会（東京都江戸川区・一八九〇年六月婦人会開始・一八九一年一〇月伝道所開設・

一八九四もしくは一八九五年教会設立）

福島新町教会（福島県福島市・一八九七年五月教会設立）

仙台川平教会（宮城県仙台市・一八九八年九月教会設立）

新庄教会（山形県新庄市・一八九八年伝道開始・一九一三年六月教会設立・

二〇二二年四月新庄本町教会が他の二教会と合併）

玉出教会（大阪府大阪市・一九〇二年五月天王寺教会設立・一九一四年玉出教会伝道開始）

滝野川教会（東京都北区・一九〇四年九月教会設立）

御所教会（奈良県御所市・一九〇六年七月教会設立・現在は日本基督教団の連合長老会に属する）

八丈島教会（東京都八丈島八丈町・一九一四年二月伝道開始・一九二四年五月教会設立）

浅草北部教会（東京都台東区・一九二〇年七月伝道開始・一九三七年五月教会設立）

中野桃園教会（東京都中野区・一九二七年七月教会設立）

埼玉大通り教会（埼玉県さいたま市・一九五二年二月伝道開始・

一九五五年五月伝道所開設・一九七一年七月埼玉大通り伝道所として開設

南住吉教会（大阪府大阪市・一九五六年七月祈祷会開始、一九五七年玉出教会伝道所として開設）

聖学院教会（埼玉県上尾市・一九七六年四月礼拝開始、一〇月緑聖伝道所として開設）

引き続き、いわゆる旧「デイスイプルス派」の伝統が生み出した学校および諸施設のうちで、現存するものについて確認したい。なお、これから紹介する中には、宣教師のミッションが生み出した幼稚園が後に教会に運営が任せられ、やがて学校法人を設立しそこに寄付されたケースや、教会が付嘱の幼稚園として生み出した後に学校法人に寄付されたケース、財団法人から社会福祉法人に組織変更したケースなどもあり、現在では四つの法人の中に一四の学校および施設が現存する形となっている。同一法人内での交流はあるが、法人を超えての交流はほぼ行われておらず、ましてや教会との交流については関係教会に限られている状態である。

二〇二一年現在、旧「デイスイプルス派」の伝統が生み出した学校および諸施設は、年代順に次の通りとなる。

学校法人秋田キリスト教学園秋田幼稚園（一九〇五年一月・宣教師のミッションが創立）

学校法人聖学院女子聖学院中学高等学校（一九〇五年一月・神学部として創立）

学校法人聖学院聖学院中学校高等学校（一九〇六年九月・聖学院中学校として創立）

学校法人聖学院聖学院幼稚園（一九二二年四月・中里幼稚園として創立）

学校法人秋田キリスト教学園認定こども園本荘幼稚園（一九二六年五月・本荘教会付属として設置）

社会福祉法人康保会康保会玉淀園（一九四七年一〇月・敗戦による棄乳児のために乳児院を設置）

社会福祉法人康保会康保会保育園（一九五〇年五月・再建復活、前身は一九二〇年七月開設の浅草会館に遡る）

学校法人キリスト教若葉学園若葉幼稚園（一九五三年四月・鶴岡教会付属として設置）

学校法人聖学院聖学院小学校（一九六〇年四月・女子聖学院小学部として設置）

社会福祉法人康保会 康保会乳児保育所（一九七一年六月設置）

学校法人聖学院聖学院みどり幼稚園（一九七八年一月・女子聖学院短期大学付属として設置）

一九六七年に設置された短期大学は聖学院大学への全面改組により廃止された

学校法人聖学院聖学院大学（一九八八年四月設置）

学校法人聖学院聖学院大学大学院（一九九六年四月設置）

社会福祉法人康保会 東上野乳児保育園（一九九七年六月設置）

これら一四の学校および諸施設は次の四つの法人（設立年代順）の中に置かれている。

社会福祉法人康保会（一九二〇年七月・浅草会館として創立し後に康保会と名称変更）

一九五二年に財団法人から社会福祉法人に組織変更）

学校法人聖学院（一九二〇年設立の財団法人聖学院と一九三六年設立の財団法人女子聖学院が私立学校法施行にともない

一九五一年三月に設立）

学校法人秋田キリスト教学園（一九八二年三月設立）

学校法人キリスト教若葉学園（二〇〇三年一月設立）

これまで見てきたように、旧「デイスイプルス派」の伝統が生み出した教会、学校、諸施設は現在、宗教法人、学校

法人、社会福祉法人と別々のものになっているが、秋田や鶴岡の例で言えば、幼稚園を寄付するまで付属施設として運営していた教会の牧師が学校法人設立当初の理事長として就任している。学校法人は財団法人の特殊な形として定められたものであり、いずれも最初に寄付をした者の意志を実現するために存続してゆくべき法人である。このことから、学校法人について言えば宣教師のミッションや教会の意志を実現させるための組織であることに変わりはない。現状の把握をした上で、歴史を振り返ることによって、先達の意志を共に受け取り、相互の交わりと成長につながることを願っている。

## 2 チャーチ・オブ・クライスト(キリストの教会無楽器派)の伝統のうち

### 現存する教会と学校および諸施設

これまで、いわゆる旧「デイサイプルス派」の伝統が生み出した教会と学校および諸施設のうちで、現存するものについて確認してきた。その数は一六の教会(新庄については要検討)と、四つの法人の中に一四の学校および施設が現存している(この中に聖学院神学校が合流した東京神学大学は含めていない)。

それでは、一八八三年に来日した正式にはクリスチャン・チャーチ・デイサイプルス・オブ・クライストと呼ばれる運動の日本宣教によって生み出された教会と学校および諸施設のうち、現存するものはこの三〇のみなのであろうか。実はそうではない。この運動の分裂についての細かい経緯は別の機会に詳しく述べることになるが、一八八九年にチャーチ・オブ・クライスト(キリストの教会無楽器派・以下無楽器派と略する)が分かれ、一九二〇年にはクリスチャン・チャーチ(キリストの教会有楽器派・以下有楽器派と略する)といわゆる旧「デイサイプルス派」が分かれ、三つの派に分かれていくこととなるからである。

だから、一八八三年に来日したクリスチャン・チャーチリバイブルス・オブ・クライストの日本宣教についての二〇二一年の時点での現状については、無楽器派と、有楽器派の現存する教会と学校および諸施設を加えて初めて把握できるのである。

そこでまずは、無楽器派のうち、『キリスト教年鑑2020』より、現存する教会について確認をしたい。なお、( )内の年号は設立年であるが、年鑑に設立年が記されていないものは「未確認」としてある。  
無楽器派の教会は日本国内に四六教会が現存している。

- 常陸太田キリストの教会（茨城県常陸太田市・一九二六年）
- 興津キリストの教会（静岡県静岡市・一九二六年）
- 瓜連キリストの教会（茨城県那珂市・一九三三年）
- 日立キリストの教会（茨城県日立市・一九四七年）
- 多賀キリストの教会（茨城県日立市・一九四七年）
- 水戸キリストの教会（茨城県水戸市・一九四八年）
- 大みかキリストの教会（茨城県日立市・一九四八年）
- 御茶の水キリストの教会（東京都千代田区・一九四八年）
- 勝田キリストの教会（茨城県ひたちなか市・一九四九年）
- 日高キリストの教会（茨城県日立市・一九四九年）
- 清水キリストの教会（静岡県静岡市・一九五〇年）
- 野毛山キリストの教会（神奈川県横浜市・一九五一年）
- 華川キリストの教会（茨城県北茨城市・一九五二年）
- 上野原キリストの教会（山梨県上野原市・一九五三年）
- 沼津キリストの教会（静岡県沼津市・一九五三年）
- 那覇キリストの教会（沖縄県那覇市・一九五三年）
- 水戸袴塚キリストの教会（茨城県水戸市・一九五四年）
- 石川キリストの教会（沖縄県うるま市・一九五四年）
- 那珂湊キリストの教会（茨城県ひたちなか市・一九五五年）
- 石岡キリストの教会（茨城県石岡市・一九五六年）
- 蔵キリストの教会（埼玉県蔵市・一九五六年）
- 仙台キリストの教会（宮城県仙台市・一九五七年）
- 土浦キリストの教会（茨城県土浦市・一九五九年）
- 横田キリストの教会（東京都福生市・一九六〇年）

松戸キリストの教会（千葉県松戸市・一九六一年）

立川キリストの教会（東京都立川市・一九六二年）

相模台キリストの教会（神奈川県相模原市・一九六四年）

友部キリストの教会（茨城県笠間市・一九八五年）

ロゴスキリストの教会（沖縄県沖縄市・一九九五年）

大阪玉造キリストの教会（大阪府大阪市・二〇〇三年）

八戸キリストの教会（青森県八戸市・未確認）

高萩キリストの教会（茨城県高萩市・未確認）

久慈浜キリストの教会（茨城県日立市・未確認）

額田キリストの教会（茨城県那珂市・未確認）

大子キリストの教会（茨城県久慈郡大子町・未確認）

小瀬キリストの教会（茨城県常陸大宮市・未確認）

石塚キリストの教会（茨城県東茨城郡城里町・未確認）

金沢キリストの教会（神奈川県横浜市・未確認）

大月キリストの教会（山梨県大月市・未確認）

富士吉田キリストの教会（山梨県富士吉田市・未確認）

静岡中央キリストの教会（静岡県静岡市・未確認）

大岩キリストの教会（静岡県静岡市・未確認）

中田キリストの教会（静岡県静岡市・未確認）

大井川キリストの教会（静岡県焼津市・未確認）

大阪キリストの教会（兵庫県宍粟市・未確認）

那覇中央キリストの教会（沖縄県那覇市・未確認）

無楽器派の団体は日本国内に一団体が現存している。

来日宣教師社団（東京都・御茶の水・一八九二年）

無楽器派の学校は日本国内に一法人の中に五校が現存している（幼保連携型認定こども園は学校教育法上の学校ではなく教育基本法上の学校）。

学校法人茨城キリスト教学園（一九四七年）

茨城キリスト教学園高等学校（一九四八年）

茨城キリスト教学園中学校（一九六二年）

茨城キリスト教大学（一九六七年）

茨城キリスト教大学附属認定こども園みらい園（二〇一六年）

茨城キリスト教大学附属認定こども園せいじ園（二〇一六年）

無楽器派の神学校としては一施設が現存している。

キリストの教会伝道学院（東京都・立川市・一九八九年）

現在は、いわゆる旧「デイサイプルス派」と無楽器派との交流は途絶えてしまっているが、いずれも一八八三年に來日したスミス宣教師とガルスト宣教師の伝道にルーツを持つ教会と学校および諸施設なのである。

### 3 クリスチャン・チャーチ（キリストの教会有楽器派）の伝統のうち

#### 現存する教会と学校および諸施設

これまで、ストーン・キャンベル運動の日本宣教のうち、いわゆる旧「デイサイプルス派」と「チャーチ・オブ・クライスト」（キリストの教会無楽器派）の現存する教会および諸施設について確認をしてきた。次に、残る「クリス

チャン・チャーチ」(キリストの教会有楽器派)のうち、『キリスト教年鑑2020』より現存する教会および諸施設について確認をしたい。

有楽器派の教会は日本国内に次の六六教会が現存している。

- 東京若葉キリスト教会(東京都新宿区・一九〇三年)  
世田谷基督教会(東京都世田谷区・一九二五年)  
旭基督教会(大阪府大阪市旭区・一九二五年)  
上落合キリストの教会(東京都新宿区・一九三〇年)  
南静岡キリストの教会(沖縄県宮古島市・一九三三年)  
港キリスト教会(神奈川県横浜市港区・一九四〇年)  
中野キリスト教会(東京都中野区・一九五〇年)  
左京キリスト教会(京都府京都市左京区・一九五〇年)  
大東キリストチャペル(大阪府大東市・一九五一年)  
第一キリスト教会(兵庫県伊丹市・一九五一年)  
鹿屋キリスト教会(鹿児島県鹿屋市・一九五一年)  
今泊キリストの教会(沖縄県国頭郡・一九五一年)  
狭山キリストの教会(埼玉県入間市・一九五二年)  
名古屋西キリストの教会(愛知県名古屋市長区・一九五二年)  
我孫子キリスト教会(千葉県我孫子市・一九五三年)
- 紀南基督教会(和歌山県田辺市・一九五三年)  
串良キリスト教会(鹿児島県鹿屋市・一九五三年)  
平良キリストの教会(沖縄県宮古島市・一九五三年)  
藻岩下キリストの教会(北海道札幌市・一九五七年)  
西之表基督教会(鹿児島県西之表市・一九五七年)  
桜山キリストの教会(東京都中野区・一九六〇年)  
作東キリスト教会(岡山県美作市・一九六一年)  
山王原キリストの教会(神奈川県伊勢原市・一九六四年)  
中振キリストの教会(大阪府枚方市・一九六四年)  
伴キリストの教会(広島県広島市・一九六四年)  
加治木キリストの教会(鹿児島県始良市・一九六四年)  
鹿児島キリストの教会(鹿児島県鹿児島市・一九六八年)  
飯屋キリストの教会(兵庫県淡路市・一九六九年)  
めじろ台キリストの教会(東京都八王子市・一九七〇年)  
東広島キリストの教会(広島県東広島市・一九七〇年)

小野キリストの教会（兵庫県小野市・一九七一年）  
沖繩キリストの教会（沖繩県浦添市・一九七一年）  
恩多キリスト教会（東京都東村山市・一九七二年）  
宇地泊キリストの教会（沖繩県宜野湾市・一九七二年）  
キリスト家の教会（沖繩県名護市・一九七二年）  
東区キリストの教会（北海道札幌市・一九七八年）  
片倉キリストの教会（東京都八王子市・一九七八年）  
吉野キリストの教会（鹿児島県鹿児島市・一九七九年）  
遠賀キリスト教会（福岡県遠賀郡・一九八〇年）  
町田キリストの教会（東京都町田市・一九八一年）  
林野キリストの教会（岡山県美作市・一九八三年）  
恵みキリストの教会（兵庫県宝塚市・一九八八年）  
神園キリストの教会（兵庫県西宮市・一九八九年）  
野の花クリスチャン・チャーチ  
（福岡県北九州市八幡西区・一九九七年）  
南福岡キリスト教会（福岡県福岡市博多区・一九九九年）  
旭ヶ丘キリストの教会（宮城県仙台市・二〇〇三年）  
梅田キリストの教会（東京都足立区・未確認）  
荒川キリストの教会（東京都荒川区・未確認）

余丁町基督教会（東京都新宿区・未確認）  
西荻窪キリスト教会（東京都杉並区・未確認）  
横須賀第一キリストの教会（神奈川県横須賀市・未確認）  
佐久キリストの教会（長野県佐久市・未確認）  
明石キリストの教会（兵庫県明石市・未確認）  
三栖キリスト教会（和歌山県田辺市・未確認）  
岡山クリスチャン・センター（岡山県美作市・未確認）  
野市キリストの教会（高知県香南市・未確認）  
土佐山田キリストの教会（高知県香美市・未確認）  
串木野キリスト教会（鹿児島県いちき串木野市・未確認）  
垂水キリスト教会（鹿児島県垂水市・未確認）  
末吉キリストの教会（鹿児島県鹿屋市・未確認）  
源河キリストの教会（沖繩県名護市・未確認）  
喜瀬キリストの教会（沖繩県名護市・未確認）  
真喜屋キリストの教会（沖繩県名護市・未確認）  
屋部キリストの教会（沖繩県名護市・未確認）  
渡口キリストの教会（沖繩県中頭郡・未確認）  
本部キリストの教会（沖繩県国頭郡・未確認）

有楽器派の団体は日本国内に一団体が現存している。

宗団法人四谷ミッション（東京都中野区）

有楽器派の宿泊施設としては二施設が現存している。

洞爺クリスチャンハウス（北海道虻田郡・集会・宿泊・研修）

信州バイブルキャンプ（長野県佐久市・キャンプ場）

有楽器派の神学校としては一施設が現存している。

大阪聖書学院（大阪府大阪市旭区・一九三七年）

これまで見てきたように、いわゆる旧「デイサイブルス派」と「チャーチ・オブ・クライスト」（キリストの教会無楽器派）、そして「クリスチャン・チャーチ」（キリストの教会有楽器派）をそれぞれのグループ別に見ると、教会数も少なく、小さなグループのように見える。ところが、それら全てを一八八三年にスミス宣教師とガルスト宣教師を派遣した Christian Churches (Disciples of Christ) の日本宣教として、あるいはストーン・キャンベル運動の日本宣教としてトータルで捉え直してみると、見え方が全く異なってくるのである。後に枝分かれた三つの派を合わせるならば、

一二八の教会（新庄を除けば一二七）、二つの団体、五つの学校法人および社会福祉法人のうちに一九の学校および施設（東神大は含めず）、二つの宿泊施設、二つの神学校（東神大を含めるならば三つ）が現存することになるのである。これは日本の教会および伝道所の数で比較すると、日本基督教団一六九九、日本のカトリック教会九六六、日本バプテスト連盟三一九、日本聖公会三二二、日本同盟基督教団二五五、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団二一八、日本福音キリスト教会連合一九四、セブンスデー・アドベンチスト教団一八二、日本ホーリネス教団一五二、日本キリスト改革派教会一三九に続き、*The Light of Eternal Agape* 一二八と並んで一番目に多い数なのである。もしも、ストーン・キャンベル運動が分裂することなく日本に宣教が続けられていたならば、どうなったのであろうか。なぜ三つに分裂したのだろうか。それぞれに分裂する時に何が問題となったのか。そもそも私たちの教会のルーツは何を目指した運動で教会史にどのように位置付けられるのか。分裂した三派はそれぞれ最初の運動の何を継承したのか。日本基督教団に残ったいわゆる旧「デイサイプルス派」の伝統にある私たちの教会はこの運動の歴史とメリットおよびデメリットを正しく知っているだろうか。またそれらを知ってどのように生かしていけるのか。これらの事柄について考えていくためにも、まずはバートン・ストーンとキャンベル父子の運動について詳しく把握してゆくこととしたい。

#### IV バートン・ストーンとキャンベル父子の運動について

##### 1 バートン・ストーンの運動について

これまで、いわゆる旧「デイサイプルス派」、「チャーチ・オブ・クライスト」（キリストの教会無楽器派）、「クリス

チャン・チャーチ」（キリストの教会有楽器派）の現存する教会および諸施設について、現在わかる範囲で確認してきた。現時点では三つに分裂し、それぞれ別々のグループとなっているが、一八八三年にスミス宣教師とガルスト宣教師を日本に派遣した時点においては Christian Churches (Disciples of Christ) という一つの緩やかなグループであった。そこで、私たちの教会のルーツはそもそも何を指した運動で教会史にどのように位置付けられるのかを見ていくこととしたい。

なお、この運動の概略については、「II デイサイプルス派の歴史の概略について（主に日本とのかかわりにおいて）」で紹介したが、その詳細について日本語で読める文献が二〇一九年に新たに二点刊行された。

一点目は、『わたしたちのルーツ』（C・レナード・アレン、リチャード・T・ヒューズ著、池田基宣、千田俊昭、小幡幸和、相川忠義訳、大阪聖書学院・キリストの教会伝道学院、二〇一九年。原書はC. Leonard Allen, Richard T. Hughes, *Discovering Our Roots: The Ancestry of Churches of Christ* (Ablene, TX: Ablene Christian University Press, 1986)）。なお、これは、「チャーチ・オブ・クライスト」（キリストの教会無楽器派）の牧師と、「クリスチャン・チャーチ」（キリストの教会有楽器派）の牧師との共訳となる。

二点目は、『我らの歩み——日本の「キリストの教会」有楽器派』池田基宣、大塚春香、岸本大樹著、大阪聖書学院、二〇一九年）である。

私たちの教会のルーツは、バートン・ストーンの運動とキャンベル父子の運動が合同したことに始まるゆえ、これよりバートン・ストーンの運動と、トーマス・キャンベルおよび息子のアレキサンダー・キャンベルの運動について、それぞれ見ていくこととしたい。

まずはバートン・ストーンの歩みがキャンベルの運動と合同するまでを確認したい。なお以下に記すのは、主に前述の『我らの歩み』より池田基宣が記した「第一章 復帰運動について・その一——アメリカ新大陸で新たな群れが誕生

するまで」の要約となる。

バートン・ウォーレン・ストーンは、一七七二年二月二四日、メリーランド州ポートバコで生まれた。彼の五代前のウィリアム・ストーンはメリーランド州での最初のプロテスタントの州知事であったそうだ。またアメリカ独立宣言の署名者の一人トマス・ストーンははつこ(second cousin)のようである。<sup>(20)</sup>バートン・ストーンは家庭は大家族で一五人の奴隷を所有し大規模農園を営んでおり、彼は英国国教会で幼児洗礼を受けている。一七七五年に父が亡くなり、家族と共に一七七九年にはバージニア州ピットシルベニア郡に移住、さらにはフロンティアに移住している。一七九〇年にはノースカロライナ州ギルフォード郡グリーンズボロのデイビッド・コールドウェル・アカデミーに入学。ルームメイトに誘われて参加したりバイブル集会でショックを受け、また別の集会で長老教会の牧師の説教を聴き回心し、長老教会員となったそうである。入学当初は法律家を志していたが、コールドウェル学長の励ましもあり、説教者としての道を志すこととなる。なお、聖書には十分に親しんでいたが、神学とは無縁であり、三位一体という言葉を用いることについても避ける立場であったようだ。彼が説教者となるための試験では三位一体の教理のテーマが扱われたが、彼に同情的な試験官の配慮によって三位一体についての意地悪な質問をされずに、説教者としての資格を得ることができたそうである。その後も牧師となるための諮問においてウェストミンスター信仰告白を受け入れるかどうか問われたが、ストーンは「はい、それが神の御言と一致している限りにおいてそういたします」と答え、一七九八年に按手を受け、長老教会の正式な牧師となりケンタッキー州のケインリッジ教会とコンコルド教会を兼牧することとなった。そのような中、大覚醒運動の波がケンタッキー州にも入り込んできた。一八〇一年春に、ストーンはリバイバルの集会において人々が倒れたり、力強くキリストを証しし、悔い改めを迫る姿に困惑しつつも心打たれ、この運動が本当に神の働きであると考えられるようになった。その後すぐに兼牧している両教会で説教したが、コンコルド教会では説教中に二人の少女が倒れるというリバイバル集会で見たものと同じ現象を経験したことから、ストーンは同年夏に独自

のリバイバル集会を計画した。その輪は超教派にまで広がり、それは第二次覚醒運動で有名なケインリッジ・キャン  
プ・ミーティング（天幕集会）となったのである。この時の回心者は五〇〇から一〇〇〇人に上ったが、感情的高まり  
の中で参加者の少女が妊娠する出来事が起こったり、長老派の牧師たちが他教派の牧師たちと協力したこと、無資格者  
に説教させたことなどが問題となり、他教派の人々が長老派に加わると見込んでいたがそれがかなわないと知った長  
老派の指導者たちは、ストーンと同僚に責任転嫁し、牧師の職を剥奪しようとした。これにストーンら数名が反対し、  
一八〇三年に新たに「スプリングフィールド長老会」を設立したが、一八〇四年六月には解散している。その解散に  
際して、IIの概略で述べた通り、「スプリングフィールド長老会の遺言状」(Last Will and Testament of The Springfield  
Presbytery)という文書が出され、ストーンもサインをしている。池田はこの文書について「1クリスチャンの一致  
という基本概念、2 聖書の絶対的権威、3 各個教会の自治権を強調している」としている。その後、ストーンは運動  
は「クリスチャン・チャーチ」として知られていくようになる。その運動は、ケンタッキー、テネシー、北アラバマ、  
オハイオ南部に広がり、一八一一年までには一万三〇〇〇人の賛同者を得ていたという<sup>(30)</sup>。一八二六年頃にはメンバーは  
約一万五〇〇〇人であったという<sup>(31)</sup>。

また彼は、一八二六年より定期刊行物『クリスチャン・メッセンジャー』誌を刊行している。後の一八三二年一二月  
三一日にキャンベルの運動と合同することになる。

ストーンは運動の特徴について、池田は「内なる敬虔さと外なる聖さに重きを置いた、倫理的・霊的改革」と述べて  
おり、彼の世界観を「終末論的世界観」および「世捨て人的世界観」としている<sup>(32)</sup>。また、アレンとヒューズは、「初期  
の焦点は初代教会の形や構成への復帰よりも、聖さと義なる生き方にあつた。ストーンとその仲間たちにとって、復帰  
とは何よりも先ず、初代キリスト者共同体のライフ・スタイルの回復だったのである」と述べている<sup>(33)</sup>。それゆえ、ス  
トーンは「神の王国」という言葉はほとんど用いず、「神の支配」「神の統治」という言葉を好んで用いつつ、この世の

価値観に合わせて生きるのではなく、この世においては寄留者として、神の支配への忠誠心を持って生きたというのである。<sup>34</sup> またストーンは「終末論的分派主義者」として歩む中で、文明化された社会で生きることよりも西部の田舎でシンプルライフを送ることを好んだという。<sup>35</sup> またそのようなストーンの世界観は、実際の生活の上で次の二つの特徴をもたらしたという。一つは、「この世からの分離」であり、ストーンは「群れのメンバーに不必要な持ち物を控えるように勧め、未亡人や孤児の面倒を見て、貧しい者や飢え乾いている者に仕え、奴隷を持っていたら教育して自立できるようにしてから解放するよう勧めた」という。<sup>36</sup> もう一つは、「この世の政治はそれが民主主義であれ、悪魔的で不法なものである。故にクリスチャンはそのような政治運動は、投票も含めて一切関与してはならない」という考え方であったという。<sup>37</sup> それゆえに「ストーンの群れは、税と法律の遵守以外、一切政治活動を拒否した。投票を拒否する者が多く、また、群れ全体が完全な平和主義、反戦の立場に立った」というのである。<sup>38</sup>

ストーンの運動の初期の焦点である「聖さと義なる生き方」による「初代キリスト者共同体のライフ・スタイルの回復」は、後に「初代教会への復帰」という運動へとつながっていく。「彼らの復帰への志向は、単なる歴史的伝統の拒絶のみならず、初代教会で行われていたことの積極的再建に高まっていった」のである。<sup>39</sup>

ストーンの運動の基盤の一つは「自由」の概念であった。<sup>40</sup> 「これらの急進者たちは歴史的に人々を縛り付けてきた信条や職階、伝統、さらに教理さえも投げ捨て」て、「その代わり、彼らの視線は聖なる書に顕された初代キリスト教にしっかりと据えられていた」という。<sup>41</sup> そのような「自由」に基盤を置いた結果、「ストーン運動はその始まりにおいて、ほとんど教理や形式ないし組織を持たないものであった」という。<sup>42</sup> アレンとヒューズは、「この運動を共に結びつける絆は初代キリスト教への献身であり、その最も重要な特徴と彼らが考えたのは、キリスト者としての品性と自由だったのである」と述べている。<sup>43</sup>

ストーンはまた、千年王国の到来の切迫性を強調した。そこから彼の運動のもう一つの焦点である「クリスチャンの

一致<sup>(44)</sup>」が強調されることとなる。「人間の伝統によって分断されたキリスト教世界は、明らかに千年王国の夜明けが持つ完全性に高められるはずはない……初代キリスト教への復帰をクリスチャンの一致手段とし、それによって千年王国到来を早めることになる」と主張した<sup>(45)</sup>という。千年王国を前にした「自由における一致<sup>(46)</sup>」がストーン<sup>(46)</sup>の運動を理解する上で重要な視点であろう。

以上、二次文献によりストーン<sup>(46)</sup>の運動の概略を紹介した。今後の研究には『クリスチャン・メッセンジャー』誌における彼自身の言述をたどる必要がある。

## 2 トーマス・キャンベルと息子のアレキサンダー・キャンベルの運動について

続いて、トーマス・キャンベルと息子のアレキサンダー・キャンベルの運動について見てゆきたい。以下についても主に『わたしたちのルーツ』、『我らの歩み』からの要約となる。

トーマス・キャンベルは、一七六三年二月一日、当時存在していたアイルランド王国の北部アルスター地方のダウン県（現在は英国北アイルランド）で生まれた。彼の父親はもともとはカトリックの軍人であったが、「カトリック刑罰法」(Penal Laws) によってカトリック教徒は軍人にはなれないとされ、英国国教会に転会し<sup>(47)</sup>、トーマス自身もアングリカンとして育てられている。しかし何故であろうか、彼はグラスゴー大学で学んだ後、長老派教会の牧師となつていく。トーマスは一七九八年から九年間、北アイルランドに位置するアホーレイ長老教会において牧会に従事したとい<sup>(48)</sup>う。また彼が所属した長老派とは、「分離派長老教会自治都市宣誓反対派の旧派」であつたとい<sup>(49)</sup>う。アイルランドにおけるキリスト教についての詳細は、別の機会に譲るが、彼が牧師をしていた時代には、同じ長老派であつても他のグループの長老派同士の交流も、聖餐に与ることも禁じられていたとい、トーマスは、長老派内の分裂に心を痛め、さ

らには会衆派の人々とも交わりを持つていたというのである。<sup>(50)</sup> 一八〇四年一〇月にトーマスは、アイルランド分離派長老教会は一つになるべきだと訴えたが、その申し出は却下されてしまい、そのために多くの労力を捧げてきた彼はバーンアウトしてしまったという。<sup>(51)</sup> そこで、彼は医者のアドヴァイスを受け、一八〇七年四月にアメリカに渡る事となった。<sup>(52)</sup> アメリカに移住したトーマスは、ウェストバージニア州のワシントンという町で分離派長老教会の牧師となるが、そこにおいても長老派内の他グループとの聖餐は禁止されていた。トーマスは他教派の信徒も聖餐に与らせたため、牧師就任から一年たたない一八〇八年三月に牧師職停止処分を受け、フィラデルフィア地区シノド総会に訴えるも却下され、秋には分離派教会を離れる事となった。<sup>(53)</sup> そのような状況ではあったが、彼と志を共にする知人や友人と共に学びを続け、トーマスを中心に「ワシントン・クリスチャン協会」(Christian Association of Washington) を立ち上げ、一八〇九年九月七日に『ワシントン・クリスチャン協会の宣言および提言』(Declaration and Address of the Christian Association of Washington) が公表されることとなったのである。この書物は現在、パブリックドメインとしてインターネット上にも公開されている。<sup>(54)</sup> 日本語では、有楽器派の港キリスト教会の牧師を務めた飯島正久が『宣言と訴告』というタイトルで二三の提言を要約しているが、日本語が古くわかりづらいので、要点を訳し直した。なお、( )内は、パブリックドメインによる原文である。

1. 地上のキリストの教会は一つ。(1. That the Church of Christ upon earth is essentially, intentionally, and constitutionally one; consisting of all those in every place that profess their faith in Christ and obedience to him in all things according to the Scriptures, and that manifest the same by their tempers and conduct, and of none else; as none else can be truly and properly called Christians.)

2. 地上の教会は異なる場所にあるが、会衆の間には分裂があつてはならぬ。(2. That although the Church of Christ upon earth must necessarily exist in particular and distinct societies, locally separate one from another, yet there ought to be no schisms, no uncharitable divisions among them. They ought to receive each other as Christ Jesus hath also received them, to the glory of God. And for this purpose they ought all to walk by the same rule, to mind and speak the same things; and to be perfectly joined together in the same mind, and in the same judgment.)

3. 神の言葉ははっきりと教えられてゐることを除いて、何もクリスチャンに強いられるべきことはない。(3. That in order to do this, nothing ought to be inculcated upon Christians as articles of faith, nor required of them as terms of communion, but what is expressly taught and enjoined upon them in the word of God. Nor ought anything to be admitted, as of Divine obligation, in their Church constitution and managements, but what is expressly enjoined by the authority of our Lord Jesus Christ and his apostles upon the New Testament Church; either in express terms or by approved precedent.)

4. 神の意志は旧約聖書と新約聖書に表現されているが、新約聖書には新約の教会の礼拝、訓練、運営のための掟と、個々の教会員の義務が記されている。(4. That although the Scriptures of the Old and New Testaments are inseparably connected, making together but one perfect and entire revelation of the Divine will, for the edification and salvation of the Church, and therefore in that respect can not be separated; yet as to what directly and properly belongs to their immediate object, the New Testament is as perfect a constitution for the worship, discipline, and government of the New Testament Church, and as perfect a rule for the particular duties of its members, as the Old

Testament was for the worship, discipline, and government of the Old Testament Church, and the particular duties of its members.)

5. 主イエス・キリストの命令と礼拝について、聖書が黙している事柄については、新約聖書と同じくらい古いものでない限り、教会の信仰や、礼拝に取り入れたり、クリスチャンの交わりの条件にしてはならない。(5. That with respect to the commands and ordinances of our Lord Jesus Christ, where the Scriptures are silent as to the express time or manner of performance, if any such there be, no human authority has power to interfere, in order to supply the supposed deficiency by making laws for the Church, nor can anything more be required of Christians in such cases, but only that they observe these commands and ordinances as will evidently answer the declared and obvious end of their institution. Much less has any human authority power to impose new commands or ordinances upon the Church, which our Lord Jesus Christ has not enjoined. Nothing ought to be received into the faith or worship of the Church, or be made a term of communion among Christians, that is not as old as the New Testament.)

6. 体系的な聖書研究から得られる結論は神の聖書の教義と呼ぶことができないだろうが、クリスチャンの良心を拘束するものではない。教会の交わりの条件とするべきではなく、教会の強化と育成にのみ役立てるべきである。(6. That although inferences and deductions from Scripture premises, when fairly inferred, may be truly called the doctrine of God's holy word, yet are they not formally binding upon the consciences of Christians farther than they perceive the connection, and evidently see that they are so; for their faith must not stand in the wisdom of men, but in the power and veracity of God. Therefore, no such deductions can be made terms of communion, but do properly

belong to the after and progressive edification of the Church. Hence, it is evident that no such deductions or inferential truths ought to have any place in the Church's confession.)

7. 教義や弁証は便利なるものであるが、人間の理性で割り出したものなので、クリスチャンの交わりの条件にしてはならぬ。(7. That although doctrinal exhibitions of the great system of Divine truths, and defensive testimonies in opposition to prevailing errors, be highly expedient, and the more full and explicit they be for those purposes, the better; yet, as these must be in a great measure the effect of human reasoning, and of course must contain many inferential truths, they ought not to be made terms of Christian communion; unless we suppose, what is contrary to fact, that none have a right to the communion of the Church, but such as possess a very clear and decisive judgment, or are come to a very high degree of doctrinal information; whereas the Church from the beginning did, and ever will, consist of little children and young men, as well as fathers.)

8. 教会に加わる資格を得るためには、特別な理解や特殊な知識を持つ必要はない。むしろ、自分の迷い滅びゆく状態を聖書から正しく理解し、あらゆる点でイエスの御言葉ごおり従い、イエスを信じる(ことを言い表し、イエス・キリストを通して救いに至る方法を正しく判断すれば十分である)。(8. That as it is not necessary that persons should have a particular knowledge or distinct apprehension of all Divinely revealed truths in order to entitle them to a place in the Church; neither should they, for this purpose, be required to make a profession more extensive than their knowledge; but that, on the contrary, their having a due measure of Scriptural self-knowledge respecting their lost and perishing condition by nature and practice, and of the way of salvation through Jesus Christ, accompanied with a

profession of their faith in and obedience to him, in all things, according to his word, is all that is absolutely necessary to qualify them for admission into his Church.)

9. 恵みによつてこのような告白をした者は、お互いに神の聖徒と考え、愛し合うべきである。(9. That all that are enabled through grace to make such a profession, and to manifest the reality of it in their tempers and conduct, should consider each other as the precious saints of God, should love each other as brethren, children of the same family and Father, temples of the same Spirit, members of the same body, subjects of the same grace, objects of the same Divine love, bought with the same price, and joint-heirs of the same inheritance. Whom God hath thus joined together no man should dare to put asunder.)

10. クリスチャンの間の分裂は恐ろしい悪である。キリストの体を切断することになり、キリストの体の一致を破壊する反キリストがある。(10. That division among the Christians is a horrid evil, fraught with many evils. It is antichristian, as it destroys the visible unity of the body of Christ, as if he were divided against himself, excluding and excommunicating a part of himself. It is antisciptural, as being strictly prohibited by his sovereign authority; a direct violation of his express command. It is antinatural, as it excites Christians to contemn, to hate, and oppose one another, who are bound by the highest and most endearing obligations to love each other as brethren, even as Christ has loved them. In a word, it is productive of confusion and of every evil work.)

11. 神の啓示を無視したり、人間が作り出した決め事を礼拝や信仰に取り入れ、交わりの条件としたりするような

とが、分派や腐敗の原因である。(11. That (in some instances) a partial neglect of the expressly revealed will of God, and (in others) an assumed authority for making the approbation of human opinions and human inventions a term of communion, by introducing them into the constitution, faith, or worship of the Church, are, and have been, the immediate, obvious, and universally acknowledged causes, of all the corruptions and divisions that ever have taken place in the Church of God.)

12.

地上の教会の完全性と純粋性のために必要なのは四つの実践。(1) 聖書の権威を認める信仰を言い表した者のみが、教会員として受け入れられるべきである。(2) この告白の真实性を心と行為で表し続けている限りは教会の交わりを続けられる。(3) 説教者は、神の言葉にはつきりと表明されていること以外に何も教えない。(4) 教会の行政においては、新約聖書に示されている初代教会の模範によく従って、人間の意見や発明などを入れずに行うこと。(12. That all that is necessary to the highest state of perfection and purity of the Church upon earth is, first, that none be received as members but such as having that due measure of Scriptural self-knowledge described above, do profess their faith in Christ and obedience to him in all things according to the Scriptures; nor, secondly, that any be retained in her communion longer than they continue to manifest the reality of their profession by their temper and conduct. Thirdly, that her ministers, duly and Scripturally qualified, inculcate none other things than those very articles of faith and holiness expressly revealed and enjoined in the word of God. Lastly, that in all their administrations they keep close by the observance of all Divine ordinances, after the example of the primitive Church, exhibited in the New Testament; without any additions whatsoever of human opinions or inventions of men.)

13. 最後に、聖なる礼拝を守るにあたり、何か必要な事情が起こり、それが聖書の中に見つからない場合、この目的のために絶対に必要なものに限り、便宜上適用してもよい。しかし、その変更や守り方の違いで、教会の分裂や争いが引き起こされないように、それらを神聖な起源を持つものとしてはならぬ。(13. Lastly: That if any circumstantials indispensably necessary to the observance of Divine ordinances be not found upon the page of express revelation, such, and such only, as are absolutely necessary for this purpose should be adopted under the title of human expedients, without any pretense to a more sacred origin, so that any subsequent alteration or difference in the observance of these things might produce no contention nor division in the Church.)

トーマスの息子のアレキサンダー・キャンベルは、父が『ワシントン・クリスチャン協会の宣言および提言』を書き上げた後に、スコットランドからアメリカへと渡り、父の運動に合流している。アレキサンダー自身は神学教育を受けてはいるが生涯に渡って按手礼は受けなかったという。しかしトーマスは息子に説教をさせ、アレキサンダーは有名な説教者、討論家、執筆家となっていた。池田は「ストーンンの群れでは牧師が按手を受けるという習慣は依然として残っていたし、聖餐や洗礼は按手を受けた牧師が行っていた。それに対して、キャンベルの群れは、牧師と信徒の線引きを設けず、対応していた<sup>(55)</sup>」ことを指摘している。

アレキサンダー・キャンベルの加わった「ワシントン・クリスチャン協会」は「協会」から「教会」へと変わる決断をし、一八一一年にブラッシュラン教会が生まれた。アレキサンダーは、聖書を学び直す中で、浸礼を受け直す決意をし、この教会において一八一一年六月一二日にトーマスやアレキサンダーを含めた七名が浸礼を受けている。<sup>(56)</sup>

ブラッシュラン教会において浸礼が行われたことから、近隣のバプテスト教会とも交流が生まれ、一八一五年にはレッドストーン・バプテスト協会に所属する教会として認められる中でアレキサンダーは『クリスチャン・バプテス

ト』誌を一八二三年から七年の間発行してゆくこととなった。またその後にはバプテスト教会から離れ、「デイサイプルス」の群れを作り出すと、一八二九年から一八六六年にかけて『千年王国の先駆け』という雑誌を発行した。<sup>(57)</sup>

一八三〇年にバプテストからデイサイプルス派が離れた際には、一万二千から二万人のメンバーがいたという。<sup>(58)</sup> それゆえに、池田は「一八三〇年頃、復帰運動の流れにある教会の会員数は約二万から三万になる」と紹介している。<sup>(59)</sup>

このようにして、それぞれに発展していったバートン・ストーンのクリスチャン・チャーチの群れとキャンベル父子のデイサイプルス・オブ・クライストの群れは、徐々にお互いを意識し、一致に向かって歩み寄っていき、一八三一年一月二日に合同して Christian Church (Disciples of Christ) となったのである。

『基督教会(デイサイプルス)史』をまとめた秋山は、その「あとがき」の中で次のように述べている。「米国の信徒達は、日本宣教のために、戦前までだけでも八〇名以上の宣教師と莫大な献金を注ぎ込み、宣教師の幾人かはこの地に骨を埋めた。もちろん、それに匹敵する数の日本人教役者も全身全霊をこの国の救いのために献げ、筆舌に絶する苦難の生涯を送られた者もある。ところが、一九四一年(昭和一六年)に、全プロテスタント教会を網羅する日本基督教団が成立し、その当然の結果として『基督教会(デイサイプルス)』の名前も日本から消え去った。教会合同はわが教会本来の主張であり、宿願達成というところであるが、しかし全米信徒がこれまで示してくれた好意や援助、さらに全生涯を伝道に献げられた内外教役者の事蹟まで忘れ去られるようなことなどあつてはならない。<sup>(60)</sup> 教会合同の本来の主張はバートン・ストーンとキャンベル父子の運動から続くものであるが、その一方で合同したこの運動が三つに分裂し、それぞれの歩みを続けていることも事実なのである。その合同と分裂に至る経緯については、またの機会に述べてゆくこととしたい。

## V 今後の展望について

### 1 今後の研究に向けて

今後の研究に向けては、ストーンとキャンベルの運動の合同から、分裂に至るまでの経緯、日本宣教の詳細、世界におけるストーン・キャンベルの運動の展開等について調べてゆくこととしたい。そのためにも、各派の教会と学校および諸施設に関係する方々のご協力を賜りたい。

### 2 周年記念に向けて

デイサイプルスによつて生み出された教会と学校および諸施設の周年記念は以下のようなスケジュールとなる。聖学院としても、それぞれの周年記念をどう過ごすのか、旧デイサイプルス派内の教会と学校および諸施設との連携をどうするのか、また無楽器派や有楽器派の教会と学校および諸施設との連携をどうするのか、検討が必要であろう。

二〇二二年 (ストーンの運動とキャンベル父子の運動の合同を一八三二年と考えた場合)

Christian Church (Disciples of Christ) の結成一九〇周年

二〇二三年 Christian Church (Disciples of Christ) の日本宣教一四〇周年

- 聖学院（神学校）設立一二〇周年
- 二〇二五年 女子聖学院中学校高等学校設立一二〇周年
- 二〇二六年 聖学院中学校高等学校設立一二〇周年
- 聖学院教会の伝道開始五〇周年
- 二〇二八年 聖学院みどり幼稚園設立五〇周年
- 聖学院大学設立四〇周年
- 二〇二九年 聖書復帰運動（『ワシントン・クリスチャン協会の宣言および提言』）から二二〇周年
- 二〇三〇年 聖学院小学校設立七〇周年
- 二〇三二年 （ストーン）の運動とキャンベル父子の運動の合同を一八三二年と考えた場合）  
Christian Church (Disciples of Christ) の結成二〇〇周年
- 聖学院幼稚園設立一二〇周年
- 二〇三三年 Christian Church (Disciples of Christ) の日本宣教一五〇周年
- 聖学院（神学校）設立一三〇周年
- 二〇三四年 秋田高陽教会創立一五〇周年
- 二〇三五年 女子聖学院中学校高等学校設立一三〇周年
- 二〇三六年 聖学院中学校高等学校設立一三〇周年
- 聖学院教会の伝道開始六〇周年
- 二〇三八年 聖学院みどり幼稚園設立六〇周年
- 聖学院大学設立五〇周年

## 注

- (1) 秋山操編著『基督教會（デイサイプルス）史』基督教會史刊行委員會、一九七三年、四頁。
- (2) 同。
- (3) 『基督教會（デイサイプルス）史』で秋山操は「スプリングフィールド長老会の最後の意志と契約」と訳しているが（五―六頁）、『我らの歩み―日本の「キリストの教會」有楽器派』で池田基宣は「スプリングフィールド長老会の遺言状」と訳している（二二頁）。内容については、WIKISOURCEでも確認できるが、「組織の解体を明らかにし、なぜそうしたのか、また、そうなった過程を説明するものである」（『我らの歩み』、二二頁）ゆえに、「遺言状」との訳出が適切であると思われる。<[https://en.wikisource.org/wiki/Last\\_Will\\_and\\_Testament\\_of\\_The\\_Springfield\\_Presbytery](https://en.wikisource.org/wiki/Last_Will_and_Testament_of_The_Springfield_Presbytery)>（二〇二二年一月一日アクセス確認）
- (4) 秋山操は『宣言と陳述』、飯島正久と池田基宣は『宣言と訴告』と訳しているが、今回、『ワシントン・クリスチャン協会の宣言および提言』と訳した。
- (5) 『基督教會（デイサイプルス）史』、七頁。
- (6) 同。
- (7) 同、八頁。
- (8) 同、九頁において秋山操は、合同の日を一八三二年一月としている。
- (9) 同、四頁。
- (10) ウィリストン・ウォーカー『キリスト教史4 近・現代のキリスト教』野呂芳男、塚田理、八代崇訳、竹内寛監修、ヨルダン社、一九八六年（原書はWilliston Walker, *A History of the Christian Church*, 3rd ed. (New York: Charles Scribner's Sons, 1970)）、二二四頁。デイサイプルスについては二二二―二二四頁で述べられている。

- (11) 『基督教会（ディサイプルス）史』、三頁。
- (12) Lester G. McAllister, William Edward Tucker, *Journey in Faith: A History of the Christian Church (Disciples of Christ)* (Saint Louis, MO: Chalice Press, 1975), 27-28.
- (13) 『基督教会（ディサイプルス）史』、二頁。
- (14) 設立年については、『基督教会（ディサイプルス）史』も『日本キリスト教歴史大事典』（一九八八年）も一八七五年と紹介しており、Archibald McLean, *The History of the Foreign Christian Missionary Society* (New York: Fleming H. Revell, 1919), 22において一八七五年一〇月二一日と紹介されている。なお、『我らの歩み』で池田基宣は「海外クリスチャン宣教協会」と訳出し、「一八七六年に『海外クリスチャン宣教協会（F C M S）が生まれていた』と記しているが（五四頁）、一八七五年が正確であろう。
- (15) 『我らの歩み』で池田基宣は「米国クリスチャン宣教協会」と訳出している（三五頁）。
- (16) 同、池田基宣は「クリスチャン女性宣教委員会」と訳出している（五四頁）。
- (17) 同、池田基宣は「合同クリスチャン宣教協会」と訳出している（五四頁）。
- (18) 『基督教会（ディサイプルス）史』、二三―二四頁。
- (19) L・D・ガルスト『チャールズ・E・ガルスト——ミカドの国のアメリカ陸軍士官学校卒業生』小貫山信夫訳、聖学院大学出版会、二〇〇三年、八五―八六頁。
- (20) 同、八八頁。
- (21) 同、八七頁。
- (22) 『基督教会（ディサイプルス）史』、二六頁。
- (23) 同、二九頁。
- (24) 同、二八―二九頁。
- (25) 同、三〇―三一頁。
- (26) 『チャールズ・E・ガルスト』、二五九頁。
- (27) 同、五一六頁。

- (28) 同、二五九頁。
- (29) Douglas A. Foster, Paul M. Blowers, Anthony L. Dunnivant, D. Newell Williams (eds.), *The Encyclopedia of the Stone-Campbell Movement* (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 2004), 702.
- (30) C・レナード・アレソ、リチャード・T・ヒューズ『わたしたちのルーツ』池田基宣、千田俊昭、小幡幸和、相川忠義訳、大阪聖書学院・キリストの教会伝道学院、二〇一九年、一一八頁。
- (31) 『我らの歩み』、三二頁。
- (32) 同、二二頁。
- (33) 『わたしたちのルーツ』、一一八頁。
- (34) 『我らの歩み』、二二頁。
- (35) 同、二二頁。
- (36) 同。
- (37) 同。
- (38) 同、二二―二三頁。
- (39) 『わたしたちのルーツ』、一一八―一九頁。
- (40) 同、一九頁。
- (41) 同。
- (42) 同。
- (43) 同。
- (44) 同、一一〇頁。
- (45) 同。
- (46) 同。
- (47) 『我らの歩み』、二四頁。
- (48) 同、二五頁。

- (49) 『わたしたちのルーツ』、一二〇頁。
- (50) 『我らの歩み』、一二五頁。
- (51) 同。
- (52) Daniel G. Reid, Robert D. Linder, Bruce L. Shelley, Harry S. Stout (eds.), *Dictionary of Christianity in America* (Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1990), 215.
- (53) 『我らの歩み』、二二六頁。
- (54) <[https://en.wikisource.org/wiki/Declaration\\_and\\_Address\\_of\\_the\\_Christian\\_Association\\_of\\_Washington](https://en.wikisource.org/wiki/Declaration_and_Address_of_the_Christian_Association_of_Washington)> (二〇二二年一月一日アクセス確認)
- (55) 『我らの歩み』、二八頁。
- (56) 同、二九頁。
- (57) 同、三〇頁。
- (58) 同、三二頁。
- (59) 同。
- (60) 『基督教会（ディサイプルス）史』、八三一頁。

## 参考文献

秋山操編著『基督教会（ディサイプル）史』基督教会史刊行委員会（滝野川教会）、一九七三年

C・レナード・アレン、リチャード・T・ヒューズ『わたしたちのルーツ』池田基宣、千田俊昭、小幡幸和、相川忠義訳、大阪聖書学院・キリストの教会伝道学院、二〇一九年（C. Leonard Allen, Richard T. Hughes, *Discovering Our Roots: The Ancestry*

*of Churches of Christ* (Ablene, TX: Ablene Christian University Press, 1988))

池田基宣、大塚春香、岸本大樹『我らの歩み——日本の「キリストの教会」有楽器派』大阪聖書学院、二〇一九年

ウィリストン・ウォーカー『キリスト教史 4 近・現代のキリスト教』野呂芳男、塚田理、八代崇訳、竹内寛監修、ヨルダン社、

一九八六年 (Williston Walker, *A History of the Christian Church*, 3rd ed. (New York: Charles Scribner's Sons, 1970))

L・D・ガルスト『チャールズ・E・ガルスト——ミカドの国のアメリカ陸軍士官学校卒業生』小貫山信夫訳、聖学院大学出版

会、二〇〇三年 (Laura Delany Garst, *A West-Pointer in the Land of the Mikado* (New York: F.H. Revell, 1913))

キリスト教年鑑編集委員会編『キリスト教年鑑2020』キリスト新聞社、二〇二〇年

日本基督教団事務局編『日本基督教団年鑑2020』日本基督教団事務局、日本基督教団出版局発売、二〇一九年

Douglas A. Foster, Paul M. Blowers, Anthony L. Dunnivant, D. Newell Williams (eds.), *The Encyclopedia of the Stone-Campbell*

*Movement* (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 2004)

Lester G. McAllister, William Edward Tucker, *Journey in Faith: A History of the Christian Church (Disciples of Christ)* (Saint Louis,

MO: Chalice Press, 1975)

Archibald McLean, *The History of the Foreign Christian Missionary Society* (New York: Fleming H. Revell, 1919)

Daniel G. Reid, Robert D. Linder, Bruce L. Shelley, Harry S. Stout (eds.), *Dictionary of Christianity in America* (Downers Grove, IL:

InterVarsity Press, 1990)